

上海にはり出された、左から王洪文、張春橋、江青、姚文元攻撃スローガン



人民中国の悲劇とその波紋

誰が、こんなに早く江青未亡人
ら文革派が批判されることを予
想したのだろうか。その謎とジレ
ンマ、今後の動向を考えてみる

座談会

竹内 実
永井 陽之助
中嶋 嶺雄

非毛沢東化まで行きつくか

竹内 毛沢東死後、華国録の主席就任、王洪文、張春橋、江青、姚文元の「グー
デタ未遂」毛沢東指示改訂、選挙捏造、「逮捕」という一連の事件は、報道自体
なまなましくて、そこから意味を引き出すとか論評するという余地がないくらい
ですね。こういうふうに中国では政治的状况が展開しているというところを知り
りほかはないという、事実としての迫力がある。にもかかわらず、いったいいつ
どういふ会議で華国録が党主席になったかもわからないという、いろいろなわか
らなさがついてまわっているところが、特色です。

中国が今後どうなるか。十月八日の決議になると思いますが、毛沢東の記念堂
をつくり遺体を安置すること、毛沢東遺集、毛沢東全集を出版すること、とくに
後者については、華国録を初めとする党中央が直接指導するという。この限りで



竹内 実氏
(京都大学教授・現代中国研究)

は、毛沢東の權威の正統的な継承者が華国録であることは、一応ある範囲での合意ができたのではないか。華国録の權威というか、中国でいう「威信」が着々と民衆の間にうち立てられつつある。

そこから先を見通すと、毛沢東思想あるいは路線については、この際、急激な全面的否定を行うことはむずかしいのではないかと思えます。一方で記念堂をつくったり、選集、全集を出しながら、それを全面否定することは、論理矛盾になる。しかし、これまで毛沢東思想・路線の忠実にして正統的な継承者とみられてきた四人のグループが失脚したということは、当然、影響する。中嶋さんがすでに指摘されているように、非毛沢東化が現実的には始まらざるをえないと思う。ただ私



水井陽之助氏
(東京工業大学教授・政治学)

は、それがどちらになるかというふうに考えるよりも、それが華国録に課せられた課題であり、華国録のジレンマである……と、ワンクッションおいて今後をみていきたいと思うんです。

中嶋 一連の事件の衝撃性については、私自身も同じように考えます。しかし、驚くべきことは、文化大革命という言葉がいままでしょつちゅう出ていたけれども、十月十日人民日報社説では文化大革命の成果を受け継げという過去形で、一回しか出てこない。その点で、文化大革命は清算されつつあるんじゃないか。

そのあとさらにそれがどこまでゆくか。この十年間、最終的に指導してきたのは毛沢東です。だから、これほど江青夫人を初めとする彼



中嶋嶺雄氏
(東京外国語大学助教授・現代中国研究)

らの悪事があればならぬならば、毛沢東だけが健全であったというとはいえない。そこに華国録のジレンマがあるわけで、少なくとも反文化大革命が始まった場合、この反動が大きくて、とめどもなくはずみがつき、非毛沢東化も当然、含まれてくると思うんです。

とくに中国人は、人間が死ぬと、その人間についてプラス三十点、マイナス三十点という考課表をつける。功罪をはかる。プラス二十点の人が出れば、その一族は面子を保つ。マイナスが出れば、その一族共同体は面子を失う。いつもかたをつける、清算するという思想がある。毛沢東政治は、かなりの無理をしてくているから、少なくとも五七年の転期以後の毛沢東、社会主義社会における階級闘争というかつてのスターリン・テーゼと見まご

うような階級闘争、永続革命——幻の階級闘争を構想化し、絶対化して、幻と闘いながら、政治運動のなかで大衆化する——のもたらした至みは、清算されてくる。はたして劉少奇は階級の敵か、林彪は四人組の犠牲者ではなかったかという形で、単に鄧小平復活のみならず、毛沢東が相対化され、それ以後の毛沢東は誤っているところまでいく、ある種の潜在性をもっているんじゃないかと、私はみざるをえないわけです。

竹内 経過を細かく見ていきますと、華国鋒のほうにも、若干無理があるんじゃないかと思わぬです。たとえば水滸伝批判において、毛沢東が打倒すべき目標として暗示したのは、実はこんど逮捕された四人であるという消息筋の話があるけれども、当時の水滸伝批判の論理を調べてみると、水滸伝批判と走資派批判はセットになっている。走資派批判の文脈のなかから、次第に鄧小平が浮かび上がってきているので、もし毛沢東がそのときにはっきりと現状をみていたならば、当然ここでチェックしなければいけないと思うんですけども、鄧小平失脚までみすごしているという状況がある。私は、水滸伝批判が四人

組、江青を初めとするいわゆる文革派批判であつたということはいえないんじゃないかと思えるわけなんです。ということは、お互いはまだ毛沢東の権威に頼っているというか、すがっているということではないかと思う。

華国鋒とはなにか

中嶋 華国鋒はいつたい、なにか、これはわれわれのみならず、中国の民衆もわからないかもしれない。彼が出てきた経緯は、去年の秋から暮れにかけての全国農業会議で、右の鄧小平と左の江青がぶつかって、華国鋒が中間的な形で出てきたとみていいと思う。その構造は、周恩來の死後、華国鋒が首相代理になった一月から二月にかけて強かつたと思う。このことから考えてみると、当初は、上海グループと、大きくいえば周恩來、鄧小平路線、人脈的には周恩來路線、リアリストグループといつてもいいグループ。またネポティズムのにいえば、湖北省黄安県、公安部、李先念、李德生、というグループ。これらのグループのバランスの上に出てきたけれども、それで左を切つていった。しかし考えてみると、毛沢東との関係がわからない。華

国鋒の生まれがはっきりしないので、いろいろな説がある。前半はとくにわからない。ところが私の調べたところでは、すでに華国鋒は三〇年代から、抗日軍政大学を出たらしいとか、うわさがあるけれども、かなり以前から毛沢東となんらかの関係があつたみたいなんです。彼の経歴はわからないけれども、

山西省に行つて活躍して、山西省から湖南に移るのは五二年、湖南の毛沢東の故郷の湘潭地区の地区委員会書記になる。あの広大な中国で、こともあろうに、点のような毛沢東の故郷、湖南省の地区委員会に華国鋒が存在する。そこで彼がやったことは、農業問題そのものをやつたんじゃないかと、むしろ農村工作、党の書記で、中共中央、中南局という地方ビュローの責任者になる。一貫して、党の組織部とか、統一戦線工作組織部をずっと歩いた人物です。華国鋒が五五年に書いた論文(雑誌「学習」、五五年十一月、農村各階級の動態を十分に研究しようという論文を見る)と、彼自身がタネのまき方、肥料のやり方をやっていたんじゃないかと、要するに工作です。その意味では、毛沢東も同じだと思ふ。そういうイメージがあつて、二十年間、湖南

にいて、林彪事件の処理をするために、北京に呼びよせられた。

それと同時に、わからないのは八三四一部隊、公安をにぎる汪東興ですね。華国鋒と黒子の汪東興があるところで結ばれている。華国鋒が去年の一月、公安大臣になり、まさにクーデタを予防的に、電撃的におさえることができた。ひょっとすると、華国鋒にとつて、上海グループの連中はなり上がりの新参者で、いずれは排除されるべき存在であつたといふこともいえる。いままで彼は、山西省に生まれ、農民のなかに入つて、土の臭いのある人物だといわれてきたことは、ある意味では虚像で、実像は違う。そこでこういう状況のなかで決め手になるのは、華国鋒が毛沢東と血がつながっているんじゃないかという謎がある。そのへんが、ひとつの鍵になると思ふんです。このことが、中国の今後、今回の事件によって切り開かれた政治の方向、社会のダイナミズムと、やがて矛盾してくることがあるかもしれない。逆にそういう経歴をもっているために、彼自身はけっして安定していないと思ふんです。

その点でもう一言つけ加えると、今回の事

件は、これはひょっとすると、周恩来がうっていた戦略、彼は命は長らえなかつたけれども、その戦略は生きてきたんじゃないか。七四年一月に、軍区の大移動をやつた。それはなぜかわからなかつたけれども、今回みていると、大移動を行つて新しい部署についた人の名前があがつている。陳錫聯、許世友とか。

永井　そういう意見は、ニューヨーク・マガジン八月一日付で出ていた。つまり周恩来はガンだといふことを、七二、三年ごろから意識して、布石をうつていた。鄧小平をまず後継者にして、彼がだめになつた場合の秘密兵器として、華国鋒を準備していた。公安時代に周恩来と緊密に結びついていたといふ……。周恩来とどこで結びついたか。

竹内　中嶋さんの話では、華国鋒は毛沢東の血をひいているかもしれない。純粹な文革派になる可能性もあつた人物ですね。しかも周恩来路線にのる人物でもある。そこをどういうふうに……。

中嶋　華国鋒自身は自覚していたかどうかかわからないけれども、周恩来の布石、路線のなかで動いて……。

竹内　それは毛沢東、周恩来からみた場合でしよう。華国鋒が毛沢東をどういうふうにみていたかといふことですけれども……。ドラマにストーリーとプロットがあるように、ストーリーは書けるが、Aが発言してBが受け答をする。限られた場面々々での納得のゆく展開が必要でしょう。中国の歴史はドラマティックだけれども、その一局面でAとBがどういう関係にあつたかという謎が解けてゆかないと、ストーリー全体が成立しないと思ふんです。華国鋒にはすでにいくつかの伝説ができてつあつて、毛沢東が病床に呼び寄せて、あとをよろしく頼むといつた。今の段階では彼が証拠としていっているのは毛沢東の言葉です。

江青夫人の方は既定の方針どおりやれという文章、華国鋒は捏造だといっているけれども、言葉と文章は同じ毛沢東から出ているから、相対化してみれば、江青たちのクーデタが成功していれば、華国鋒のほう証拠が乏しい。ストーリーは各々組立てられるけれども、プロットはどうなっているかといふことは、いくつか疑問が出てくるわけです。

たしかに華国鋒という一無名の人物がなぜ湘潭地区に呼ばれたか。これは一つの謎であ

るし、それがなぜ中央に出てきたかも知れず、ね。私は、許されればすべてを投げ打って中国大陸を取財して歩きたいけれども、それは絶対に許されないから、文書で判断するほかないんですが、農業全国大会の華国録の論文から私の出した結論は、彼は文革的であるけれども、脱文革的である。そしてどちらにもコミットしていかないことです。それが可能であったということは、今の中国での華国録の独自性とみるよりも、彼は毛沢東と特別のパイプでつながっていたんじゃないかという推測しかない。それが中嶋さんが指摘されたように血筋の関係か、それとも周恩来の布石の上に彼が乗ったのか。それは先へいつてみないとまだわからないけれども、今できつつかある華國鋒伝説にはまだ矛盾があると思ふんです。

中嶋 周恩来の布石、戦略を華國鋒が意識しているということではなくて、彼はあるいは気づいていないかもしれない。今、ドラマ自身が自己運動を展開しているけれども、それはひょっとすると、どっかで周恩来が一度考えたことではないかという、一種の幻想的な意味で私は申上げたわけです。

革命継承の正統性は何か

竹内 四期人民代表大会で決めた憲法は、その規定自体としては、すべての権力が毛沢東に集中する構造になっている。あそこで周恩来がやった政治報告は、毛沢東の言葉をいろいろ引用して、そこはゴシックになっているけれども、周恩来は文化大革命を繰返して革命中国を建設しようとは一言もいっていない。ゴシックにしている部分では、中国はまず自分の問題を解決しなければならぬといっている。その意味では周恩来に一つの構想があったことは認める。けれども、全国農業会議における華国録の報告では、すべて周恩来にコミットしているということではない。彼はそれほど中国の民衆に知られていないこともあって、今、主席にふさわしい威信を民衆の間に普及しようとして努力しているということとはいえると思うんですね。

それではなぜ民衆の間の人気から生れたものではない華国録のような人物がここで登場したかといえば、一般の底辺では無告の民といわれている民衆の人氣によると思う。華国録が登場したということは、アメリカでは意

外でないといわれているし、われわれでも意外でないといえれば意外でないわけだけれども、しかしそれにしても、あまりにも早くきたということはみんな感しているし、四人を一挙に逮捕にまでもつていったことは、あまりにも華国録の決断がよすぎる。この二つのなかに、一つの文脈があるのではないかと思うんです。重要なポイントとしては、彼の決断力がどこから出てきたかということです。それは血縁でも、自分は正統であるという根拠があるかもしれないけれども、そこまでわからないばかりとしてみると、民衆が支持するという洞察が彼にはあったんじゃないか。

ここで四人を逮捕しても、あるいは処刑しても、これに対して民衆が自発的に抗議を申込むことはまずありえない。もちろん文革のなかで出てきた中堅幹部や青年層のなかには、文革の思想に対して熱烈な信奉者が出ているし、それらの抵抗、摩擦は当然計算に入れたと思うけれども、華國鋒は、大丈夫だということは見通したんじゃないか。

中嶋 華国録の決断が意外な雪崩現象をおこしている。これは、文革派が今まであまりにもむちゃなことをやってきたために、積年の

怨念と憎悪が沈澱していたので、雪崩現象がおきている。その意味では、彼は今はすみの上に乘っていると思うんですけれども、私はそのへんが逆にこわいというか、もう少しじわじわとこの転換がおこってほしいと思うんです。それが、毎日のように下ラや太鼓でやっています。この間まで批林批孔という歌をうたっていた幼稚園の生徒が、四人組批判をはじめ。文化大革命、林彪事件と同じような、エクスタシーを伴う状況だが、大衆のエモーションをかきたてて、公敵をつくってゆくという、レーデラーがいう大衆国家的な状況から訣別して、ある発展がくるまでには、もう一回何かなければならぬという気がする。華国録の決断によって、一つの雪崩現象がおこって、彼が政治的な基盤を拡大していったらうという側面と、それは裏腹であって、彼自身も余儀なく決断せざるをえなかった、もつと遑うバックがあつたのではな

いか。そこでぼくははっきり断定できないけれども、鄧小平という人物、あるいは鄧小平的なものといつてもいいけれども、いわゆる走資派の人たちが去年から今年にかけて、鄧小平は最後まで身体を張って毛沢東政治、江青の

わがままに抵抗したんじゃないかと思う。しかも周恩来路線を最後まで悔い改めなかったんじゃないか。

竹内 ここで文革派の四人を切つても民衆の反感、反感はそれほど大きくかぶらないだろうという推察は鄧小平だつてできたらうし、もしかしたら四人組自身もうすうす感じていたかもしれないと思うんです。ただ、一般論としての力関係と、個人運命ということを考えて、そこに華国録がいたことの意味が一つあると思う。そこにいたから将来消えてゆくということもあるし、鄧小平だつて今後復活するかもしれないが、鄧小平にとっての最大のマイナスはその場になかったということですね。反動を引受ける覚悟が華国録になれば、決断できなかったと思うんですね。文革派も人材を養成しているし、そのなかから華国録暗殺を企てる集団、個人が出てくることは当然ありうるし、これからいらないデオロギー的な操作をやつてゆく上でも困難はあるが、それを含めての決断をしたということ。いまの華国録の状況は、「選ばれてあることの恍惚と不安」みたいなものかもしれないですね。

華国録がわりと長続きするということを、毛沢東が死ぬ前の予測で私は述べた。その根拠は、彼が公安を握っているということ。こんなも同じ決断を鄧小平もしたかもしれないが、その決断を実行に移すについては、彼は解放軍を動かすことはできたかもしれないが、直接的に動かすことはむずかしかつたと思う。ところが、鄧小平と比較すると、華国録ははるかに決断を実行に移すことが容易であつた。つまり自分の部下の特別な武装部隊を動かせばいい。それが将来、華国録にとってはプラスになると思うんです。たしかに彼には決断を迫つた民衆の底流があるし、その上に人民解放軍のゆるやかな意志統一があると思うけれども、人民解放軍といつてもいろんな軍区があるから、集会を開いて一致した結論を出すには時間がかかるし、それが華国録の主席就任を正式に報道するのが遅れていた一つの原因でもあると思うんですね。

永井 こんどの中国の政変だけではなくて、アメリカでも日本でも、全世界的な傾向としてリーダーの交代、世代の交代がおこなわれている。だが、ロートルがだめになつていくが、河野洋平みたいな若手のところまでゆか

ず、その中間の指導層に優秀なやつがないために、今まで全く無名だった、アメリカからカーターが、中国でいえば華国鋒が出たりする傾向がある。

中国でわからないのは、なぜ毛沢東は、劉少奇から始まって、次々と後継者を消していったのかということですね。全体主義体制、とくに毛沢東、スターリン、レーニン、ヒッラー、ナポレオンのように、カリスマ的な権威と自分の個人的な業績、革命によって権力を奪取して新しい正統性を作った場合、最大の問題は後継者が正統性を何によって保障するかということです。そこで血縁という問題も出てくる。ナポレオンもナポレオン王朝の永続化のために、自分が皇帝にならざるをえなかつたし、メッテルニヒの術策にひつかかって、オーストリア・ハンガリー帝国のプリンセスと結婚したりしている。毛沢東の悩みも、永続的な毛王朝をいかに支えるかということだつたでしょう。江青ではだめなこと、彼も知っていたと思う。そこで最大の矛盾がどうしても生ずるわけで、後継者をめぐって正統性を何によって保障するか。日本は天皇制があつて、一種の皇族カリスマがある

ために、その悩みがないけれども、革命権力の最大のジレンマはそこにあるわけですね。アメリカの大統領制のように人民の合意による選挙で正統性を保障するやり方は、中国ではとれない。そこで華国鋒は、毛沢東の血筋という、現実かフィクションかわからないが、神話を大衆の間に作らないと、正統性を失つてしまう。それが最大の悩みでしょうね。

スターリンか、マレンコフか

中嶋 私竹内さんと若干見方が違うとすれば、竹内さんは今回のドラマがもたらしたドラマ性そのものに意味をもたせているのかも、私にはそれがそれよりも底流に、つまり中国社会がある意味で大きな過渡期、大きな転換期であることに注目したい。中国社会自身にインテリ、テクノクラート、杭州事件で立上がった熟練労働者、科学院の技術者、國務院の官僚層など、社会のなかに一種の、リースマンの言葉でいうと拒否権集団として存在しているわけですね。彼らは毛沢東時代を挫折とすることによって、新しい時代を待望している層だと思ふんです。それが去年、今年、顕在化している。その爆発が天安門事件

だと考えます。つまり、一つの神話の時代が終つてゆく社会の内部的な成熟があるような気がする。その社会の底流と、華国鋒の現在のキャラクターがマッチしない。彼は、こんどの功績はあるけれども、短期的かもしれない。そのへんはよくわからないが、偉大な指導者の二代目は、中国の歴史のなかではわりと消えていった例が多いことからして、私が考えている中国のノーマリゼーションということ、ある意味でオーソドックス・マルキシズムへの復帰、あるいは劉少奇、鄧小平路線への復帰と考えると、そういうようになるまでには、もうひとゆれあるんじゃないか。竹内 もうひとゆれ、ふたゆれあるということとは未知のことだから、私は否定しないけれども、そして底流と華国鋒が必ずしもうまく具合に合致しないということはあるわけで、そこにドラマ性をみるわけですね。そして、それをやりとげた個人にはもう少し注目してみたいというだけのことです。底流の点では中嶋さんと私はそう変らないけれども、中央公論十一月号で紹介した李一哲大字報が意外に哲学的というか、思想的にがっちりできているという感じがするんです。そこでは江青

ら文革派を林彪集団と規定し、林彪体制を受継いでいる人間であるとする。こんどの事件がおきてみると、もし将来、江青たちに対してなんらかの論理的な批判が加えられるとすれば、当然林彪的なカテゴリーで批判を加えざるをえないだろう。華国鋒自身もまた林彪集団を摘発した中樞部にいたということがあって、林彪と江青四人組を結びつける論理は作りやすいように思う。オーソドックス・マルキシズムにゆくかどうかの前に、李一哲大字報が出している一つの概念はなかなかよくできていたと思う。

そこで、文革とは何かということですが、いきなり文革とは何かを問題にするのではなくて、文革のなかで出てきた文革と、文革を収拾したあとの文革、この二つを区別しなればいけないと思う。文革について、まるでナンセンスであった、無意味であったとはいえない側面があることは事実ですけれども、文革を肯定的に評価するときに、むしろ文革のときに批判され、苦況に立たされた周恩来が、文革を収拾したあと、毛沢東の合意をとりつけながらとつたいろいろな措置、それをも文革の成果に入れてゆくと具合が悪いん

じやないか。こんども、華国鋒によって全面的な毛沢東批判が展開されないとすれば、部分的には文革を認めると思わんですね。しかしそれは、華国鋒体制が創り出した文革であって、文革のときの文革ではない。ところが日本の一つの底流としては、常に中国に意味を見出し、そのために各段階におけるいろいろな具体的なテーマをこっちゃんにして、自分の心情と飛躍的に結びつけて評価する動きがある。それに歯どめをかけていったほうが、むしろ中国と長いつきあいができる態度ではないかと思わんですね。

中嶋 華国鋒が表に出てきたのは、文革によつてですね。湖南省革命委員会の副主任として出てくるけれども、副主任というのは曲者で、実際には党の指導者で、主任は飾りものなんです。彼は革命委員会の準備小組に籍をおいていた。その意味でまざれもなく文革幹部として表に出たことは事実であつて、いろんな経歴があつたにしても、彼は文革を全面的に否定できない立場にある。劉少奇、林彪が肯定され、名譽回復があるということになると、華国鋒の半分には反文革の潮流があつて、半分には文革が残っている。ひよっと

すると、華国鋒はマレンコフだという気がしないではない。

竹内 ソ連の政治史を詳しく吟味しないで、これはいえないけれども、華国鋒はスターリンで、毛沢東はレーニンという感じですね。それはベリア的なものもあるけれども、少なくともマレンコフではないし、ベリア的といえは、まだほかにベリアにびつたり的人物がいるのではないか。

中嶋 ぼくは華国鋒はマレンコフ……。

中ソ接近の可能性と台湾

竹内 去年ごろからポスト・マオということがいわれて、特別の詳しい情報があるわけではないから、論理的にだけ、後継者とその課題を組立て、考えてきた。毛沢東のやった功績は、将来はいろいろな評価が出てくるにしても、中国を統一し、中国を独立国家として仕上げた点だけは動かないと思わんですね。次にどういう後継者が出てくるかはわからないけれども、それこそマレンコフみたいなものが出てくるかもしれない。そこでぼくが考えたのは、もし政治的に野心をもっている人間というか、要するに覇気をもつていて、自分

も中国の歴史に足跡を残したいという人間が後継者として出てきた場合、当然毛沢東に匹敵するか、あるいはそれを上回る業績を残したいと思うだろう。そのときに中国人としていちばん可能であり、かつ名譽なことは、台湾の解放だと思ふんですね。台湾を中国統一の枠内に入れることは、毛沢東もできなかった仕事ですね。その場合の論理は中国でもいっているし、中華民国でもいっている、「中国は一つ」ということですね。

中嶋 竹内さんらしい発想でもしろいけれども、そこにも華国鋒のジレンマがあると思う。今回の事態をみていると、ことは北京の中南海ないしそのへんでおこった宮廷革命だけれども、そのリバカッションは現代の国際関係の構造をゆるがし、再編成させるに足るものです。アメリカのシュレジンジャー前国防長官が十月八日、たまたま日本に寄って帰国したけれども、彼が東京で語ったのは、華国鋒主席、張春橋首相の形で、あすにでも中国は公表するだろうということだった。マンスフィールド一行も、同様のことを知らされて帰国した。中国にとって歓迎すべきお客でも、中国の権力中枢でおこった事件はわから

なくて帰国したわけですね。しかもマンスフィールド一行は、フォード大統領がボスト毛沢東を探るために派遣した特使であった。それが探れなかったから、アメリカはかなりあわてているんじゃないか。それに反比例するように、ソ連はわが世の春の到来で、思いどおりに進行していることに満足している。このように一種の流動化が始まっているとみていいと思うけれども、その場合、三つのことがいえる。巨視的にいえば、今まで米中ソの三極構造が考えられてきたけれども、これは疑似三極構造で、実は二極構造である。根本的には、米ソ対立下に中国がある種のマヌーバビリティによって三極になりかけていたの、アメリカは中国を含めて三極にすることによって、キッシンジャー政策を方向づけてきた。けれども今回の事件で、中国は国内でさえもどうしようもないということで、中国がもっていたマヌーバビリティは音を立てて崩れていったと思うんですね。それと同時に、軍事力の点からいっても、中国のもっていたスーパード・パワーの疑似性が暴露された。しかも、中国のもっていたマヌーバビリティは周恩来、毛沢東という巨大な戦略戦術家がい

たために保たれていたけれども、どうみても今後の中国にそれは期待できないとするならば、外部世界には中国の真の姿がみえてきた。それとともに中国は、ソ連につくか、アメリカにつくかの選択をますます迫られるのではないか。ソ連は今後一年ぐらい、毛沢東一派がなくなり、今以上悪くなることはないから、いろいろな戦略を始めると思う。とくに軍部に対して、戦略戦術を行使すると思う。そのこと自体がアメリカをして、後継体制、華国鋒体制をソ連に近づけないために、中国への軍事援助の方向へ歩み寄る。しかしペーラスとしては、中国のもっていた極としての疑似性が暴露されると、中国の存在は従来のような意味をもたなくなる。文革の十年は、同時に中国が国際社会に登場して発言力を増大した十年だったけれども、そうではなくなつてゆくような気がする。

それと同時に、もしも中国がある種のノーマリゼーションを遂げてゆけば、五七年まで戻った中国であつて、毛沢東一派という神話的なファンタジックな指導者がいなくなつたということから、国際共産主義運動なり、その方向で新しい一種の流動化がおこるのでは

ないか。ソ連、ハノイと中国との関係も気がついてみると、統一と団結ということに、ひよっとするとなりはしないか。

永井 中嶋説によるとして、今までの中ソ対立を、国家対国家、政府対政府、党対党、人民対人民と分けて考えると……。

中嶋 国家対国家の抗争は宿命的で、政府対政府の関係は外交関係まで含めてかなり動くだろうし、党と党の関係改善まで進むのではないかと思うんです。

永井 ぼくはそうではなくて、華国録政権かどうか、次の政権は穏健派で、国内の経済再建を目指す工業化、実権主義的な伝統に戻ってやると思う。外交政策の面では、政府対政府の面での対ソ関係の改善をはかる。なぜかといえ、それによってアメリカがあわて、米中関係のために台湾を早くなんとか処理しなければならぬからです。華国録を権威づける最大の目標は、台湾を統一することにあるから、せいぜいその戦略として使うんじゃないか。私が会ったシカゴ大学のタンツォ教授もそれに近い意見でした。アメリカのアジア基本戦略は、対ソ戦略のために、中国を安定した強い政権にし、これを緩衝帯として使

ってゆくことだ。中ソが近づき、団結すると、日本が中ソに引張られてゆくおそれがある。それは困るので、分断するために、アメリカはなんとかして中国をアメリカなり日本に引寄せたいと考える。そのときに、最大の障害となる台湾問題をなんとかしなければならぬということ、大問題になる。アメリカは武力解放はしないという誓約を中国からとりつけて、国民の世論を納得させ、台湾をごまかして、日本なみの国交回復を目指す。そのためへのゆきぶりとして、中ソの政府間関係はよくなる。それはすでに、ユーゴ

がやっているわけですね。チトーのもとで、党と党の関係では全くソ連と路線は違いますが、政府の関係はわれわれが想像している以上にいい。そのような路線の意味では、かなり中ソ接近はあるかもしれない。しかし党路線、人民路線がそうなるとは考えられない。それでは、中国の抱って立っているアイデンティティを失う。正統性を失ってしまう。

そこで中嶋説と違うのは、後継者の問題で、中嶋説は簡単にいうと、明治維新のとき、大久保路線ではなくて、西郷が政権を握った。それが中国の悲劇であって、西郷が死

んで、あとは結局、大久保路線になるというわけですけども、それとは違うんじゃないか。やはり中国のどろどろしたものがあろうと、どっつかずの華国録が出てきたんで、簡単に中国人民は実権派を望んでいるというだけではなくて、文革的なものとか、毛沢東的なものが正統性のどっかにあるから、後継者は華国録的なものでないとだめなんで、劉少奇の合理派はだめなんです。そこからいっても、党の路線までソビエト寄りの、中ソが接近してしまうことは考えられない。

中国の価値は下ったのか

竹内 私たちは幸か不幸か、観客席にいます。舞台上では登場人物がいろいろやっています。その登場人物の状況なり主観を超えて、やがてこの芝居はある結末で終るだろうということは、先に台本を読んでいるらわかるわけですが、ぼくらは台本を渡されていないからわからない。けれども、登場人物を超えたところに一つの意思が働いていると思う。その意思是、中国では神を信じないから、歴史だと思ふし、それも中国の歴史だと思ふ。そこで中国の歴史自身は中国史であると同時に

に、それが一つの世界史だから、中国のなかで完結するだろう。文革がおこったときに、国際的にどういう連関性をもつものかと思っただけでも、あれは結局、自給自足の運動であった。こんどもそうではないか。自給自足の問題で何かやるとすれば、台湾問題であって、それは彼らのいう国内問題である。国際的には波紋をおこすけれども、国際社会に彼らが出ようとして引起した問題ではなかったわけですね。

中嶋　そこが竹内さんと違う。私がいったのは、かつての中ソ一枚岩の時代を中ソ双方が夢想しているわけではない。ただ論理として考えると、鄧小平、劉少奇路線が出てくれば、当然、中ソ関係は毛沢東的な認識における反ソ主義の時とは違ってくる。毛沢東的なソ連憎し、ソ連と一線を画すのが中国の最大目標であるという時代が終り、ソ連と対立する場面もあるが、中国内部にアメリカから軍事援助を受けていかどうか、ノーマライズされた共産主義者の拒絶反応が出てくる事象があるんじゃないか。そこに変化の可能性が出てきていること自体が、大きな国際関係全体の流動化をもたらしと思う。

私のいいたいのは、いったい中国にとって台湾とは今、何かということなんです。竹内さんは台湾は中国の国内問題だといわれたけれども、私は台湾はすでに中国の国内問題ではないと考える。中国民族の問題としては、うであつても、現実の台湾はその点で、分離されてしまったとみるわけです。アメリカはおそらく米中国交樹立すると、台湾を切ると思う。

永井　どういう意味で切る？ それはいえません。アメリカ国内で抵抗がある。

中嶋　切るといふのは、ある日、米台防衛条約を廃棄する。台湾が自前の核をもち、自助防衛努力をアメリカが援助しながら、国務省、フォード、あるいはカーター政権は表面きは台湾政権を切っていく。そのときに自助防衛努力をすでに始めているという形で、米台防衛条約廃棄、米中国交回復が出てくる。事実関係が流動化しているだけに、また長い間の懸案であっただけに、いずれその問題は出てくるだろう。カーター、フォードで時間のずれはあるだろうし、アメリカ国内にいくつかの批判があるから、ジレンマもある。たとえばそういう事態がきて、米中国交回復が

できても、台湾は残っている。米中国交樹立と、台湾が中国と一つになることは、別のことになる。少なくとも台湾の解放は、いかに華国鋒後継体制のやろうとする仕事としても、現実にはできない。

竹内　私は取組むといっただけですよ。努力目標として出てくる、それもかなり具体的に出てくるといっただけで、どういう形で解決されるとか、実現されるとかまではいいません。つまりここで私がいいたいのは、中嶋さんがアメリカは中国をかなり観察していたけれども、後継者問題では全部間違っていたといわれましたが、私はそれは思わないですね。それぞれの段階ではいい情報をつかんでいたと思うけれども、舞台にいる役者から台詞を聞いたけれども、舞台を作っている台本をアメリカは読んでいなかった。ぼくも読んでいないが、どういう台本があるかといえば、中国自身を支配する中国の思想、概念だと思えます。台本を読めないと思えば、私が考えているのはね、中嶋さんが、今までの中国は虚像であつて、こんどの事件で実像がみえた、価値が下がったといわれたけれども、私は逆にそれが中国であつて、価値が上

がるも下がるもない。これが中国だという観点が一つある。また中国における思想、概念は、すべて関係概念である。わかりやすくその概念をいえば、陰と陽ですね。陰は夜、女、大地であり、陽は天、昼、男であるというふうに実体概念をあてはめる。日本人の中国理解の扱合は、陰と陽の概念そのものほかにかみにくいから、実体概念に翻訳してつかまえる。今までの中嶋さんの予測をうかがっていると、全部実体概念に翻訳しているからわかりやすいけれども、中国人は関係概念でゆくんじやないか。中ソ接近があっても、関係概念としての接近であって、実体として中国とソ連が手を握るということではないと思

う。米中接近でも関係概念としての接近であって、何も中国がアメリカと仲よくなつたというのではないと思うわけです。

永井 ユーゴは、国家関係ではなるべくソ連を刺激しないようにしている。ユーゴの新聞は対ソ非難はやらない。逆にアメリカに対する非難はすごい。これははっきりしていて、アメリカを帝国主義という言葉を使つて非難する。それは非同盟百ヶ国を結集して、團結するには都合がいいからやっているんです。

アメリカをおおいに非難するとか、言葉の上ではね、ソビエトの悪口をいうのはやめるということはおこるだろうけれども、中国でのアイデンティティということは、自主独立が最大の眼目だから……。

中嶋 おそらくかなり流動化するというテンポでみると、台湾問題が残る。これはどうしようもないジレンマとして、台湾が共和国宣言をするか、さもなければいまの道を継続する以外にない。武力解放は実体的に不可能ですから、残る。そのときソ連は、台湾問題に気がねしない方がいい。つまりいつてみれば、ソ連がなぜアジアの戦略を拡大しているながら、台湾に対しては慎重であるかという、それほどまでに、毛沢東以後の中国に対するソ連の期待は大きかった。それを傷つける決定的な行動に出られないという範囲で、台湾を考えていた。今後、想定される状況のなかで、そういう流動化があったあと、おそらくソ連はもつと違った次元でこの問題を考えるだろう。

永井 日本政府が北方領土返還を、軍力もないので、対ソ戦略上、ソ連に対する唯一のパーゲニング・パワーとして使う。それと似

て台湾を中国は、もつと巨大な意味で、アメリカをゆさぶり、ソ連とのパーゲニングの戦術に使える。実体としては、どうにもならない、簡単に選つてこないけれども、象徴的なイシューとして、戦略的に使える。それは中国は徹底的に、今後、国際政治の上で使うという意味なんです。片方で、毛沢東の非合理的、イデオロギー的な、ソビエトを不倶戴天の敵とした関係は、少し戻って、外交交渉も行われ、貿易もやるという形で、とりこもうとする。そこで中国はマヌーバビリティが出てくる。そこが違ふと思うんですね。朝鮮半島が二分されているのは、中国の問題ではない。朝鮮半島は現状維持でいいけれども、台湾は違う。それは変えなければならぬという大義名分があるので、そもそもおれのものだという意識は絶えずつきまとう。それをうまく利用できる。これでは現状維持を認めることはできない。

竹内 ぼくは世界革命もわからないし、国際関係もわからないから、中国人のいつている言葉を通じて考えるけれども、ベイチンとタイベイが同じことをいつている意味は、これからよく考えてみたいと思うんです。

昭和20年12月1日第3種郵便物認可 昭和51年12月1日発行(毎月1回1日発行) 1077号 昭和24年3月28日(国)民営印刷業登記第440号

中央公論

北京震撼す

12月号

